

# レポート Report

大磯町郷土資料館だより  
2014・2・28

34

## 目次

- 2 | 平成24年度春季企画展関連企画講演会「大磯の地震被害と地盤を知る」講演抄録  
8 | 平成25年度博物館実習生による「大磯の名所 ― 絵はがきと写真から見る昔と今の姿 ―」展



大磯海岸における堤防の倒壊  
（『大正十二年九月一日大震災記念写真帖』  
より／当館所蔵）

全壊した大磯駅  
（当館所蔵）

大磯-平塚間で転覆した列車  
（『大正大震大火之記念』より  
／当館所蔵）

郷土資料館では、平成25年3月9日から5月12日までを会期として、平成24年度春季企画展「大磯の災害―かつてこの地で起きたこと―」を開催しました。この「資料館だより」では、企画展の関連企画として平成25年3月20日に開催しました、講演会「大磯の地震被害と地盤を知る」の講演抄録を掲載しています。東日本大震災は、私たちに、過去の災害を振り返ることの大切さを教えてくれました。この講演抄録が、過去に大磯の地域へ影響を与えた地震被害を振り返るきっかけとなり、将来の防災に役立てれば幸いです。なお、本文中には、「関東大震災」、「大正関東大地震」の表記がありますが、いずれも大正12年（1923）9月1日に発生した地震を表します。

## 平成 24 年度春季企画展関連企画講演会 大磯の地震被害と地盤を知る

### 講演抄録

#### 講演 1：地震と大磯の地盤

森 慎一 氏（平塚市博物館学芸員）



#### 東北地方太平洋沖地震

2011年の地震は東日本大震災と言いますが、気象庁での地震の名前は平成23年東北地方太平洋沖地震と言います。地震の震源域については、従来ブロックに分けて想定していましたが、今回の地震ではそのブロック4つ分の範囲、長さ500kmにわたる地域が震源域となりました。

東日本大震災で仙台湾を襲った津波を相模湾にそのまま当てはめると、平塚では金目の近くまで、大磯町、二宮町では全域が浸水することになります。しかし、相模湾ではこういう風にはならないと思います。仙台平野は地震の後1m近く沈降しましたが、こちらの地域は、相模トラフで地震が起きると必ず1m近く隆起します。ですから、同じようには考えていません。

元禄地震と大正関東大震災では、大磯町ではいずれも2～2.5mの津波が来ています。相模湾西部では津波が高くなりませんが、江ノ島から東側、特に鎌倉や葉山、真鶴から熱海にかけては津波が高くなります。

大磯町郷土資料館で発行している『むかしがたり一古

老が語る大磯の災害一』を読みました。関東大震災のときの津波のことがたくさん書いてあります。何人もの人が、波が引いてしまって、こんなことは滅多にないと沖合にアワビを採りに行っています。そして、津波は、平塚から東側、江ノ島や鎌倉の方へ逃げていったと書いてあります。その証言が一人ではなく、何人もの方が言っています。大磯はそんな状況でした。大磯では潮が引いてから津波が来ましたが、そんなに大きくありませんでした。

津波の被害は、相模湾の海底の地形が問題なんですね。覚えていただきたいことは4つです。第1に高潮は海面しか動きませんが、津波は海水全体が動きます。第2に津波は水深が深いと速くなり、浅くなると遅くなります。第3に、速度が速いと波は高くなりません。大磯の沖合はすぐに深海となるため、波が高くなりません。それに比べて、相模川から東側には海水浴ができる浅瀬がたくさんあります。浅瀬では速度が遅くなって波が高くなります。ですから浅瀬がある相模川から東側や、真鶴から伊東にかけては大きい津波が来ます。第4には、岬があると津波は回り込みます。大磯の沖合には大磯海脚という浅瀬がありますが、水深100mと深いせいか大きな津波は来ないようです。

#### 大磯町の微地形と地盤

大磯の地形は大きく3つに分けられます。一つは丘陵地で、固い岩盤からできています。二つ目は海がつくった平野、三つ目は川がつくった平野です。海がつくった平野は海岸に砂が打ち上げられてつくられるので砂地で、水はけがいい。川がつくった平野は花水川や不動川などがつくった平野です。この3つの話をします。

まずは、丘陵をつくる岩盤は安全な地盤です。年代としては10万年よりも古い。例えば月京付近は数百万年前のもので、非常に硬い地層です。照ヶ崎海岸は、海面下で作られた固い岩盤からなる波食台が大正関東地震によって隆起したところですが、ここは昔の波打際の跡です。石神台には2つの地層があり、一方は月京と同じ非常に固い地層、他方は砂なのですが、年代が古く50万年くらい経っているので、しまっています。どちらも岩盤ですので、地盤としてはいい。ただ、石神台の

場合はこの2つの地層の境に活断層が走っています。断層が動かなければ安全な地盤です。

二つ目は海がつくった地形です。沖積段丘と砂丘とがあります。沖積段丘は、昔の平野が隆起したもので、一段高くなっています。花水川の河口から高麗山の裾にかけて、西小磯、国府本郷、国府新宿に分布しています。これは、縄文時代、6,000年くらい前の温暖期に浅海を埋めてできた平野の跡です。その後で、この平野を不動川、長谷川、葛川が削り込んでいます。ですから、不動川や葛川の低地の方が低く、国府新宿や馬場の方は高いということになります。

高麗にある善福寺には、門を入れてすぐに岩盤が出ています。かつてこの場所は照ヶ崎のような海岸でしたが、地震の度に隆起してこのようになりました。境内に横穴がたくさんありますが、そこは6,000年前に大磯海水浴場の沖にある兜岩（かぶといわ）のような小島でした。

国府本郷の馬場付近は、葛川の低地より高くなっていて、坂を登ると平らになっています。平らになっている所は6,000年前の平野で、海岸の砂からなっています。ここも沖積段丘にあたります。坂の下側は葛川の氾濫原で、粘土からなります。つまり、地形が変わると地盤は全く異なるのです。

二つ目は砂丘です。東町から大磯中学校やロングビーチにかけて、海岸線沿いに平行して2列認められます。砂丘ができると後ろに凹地ができます。砂丘は砂地ですが、凹地は泥地です。砂丘はきれいな粒がそろった砂なんです。比較的粗いので液状化の心配もしなくていいと思います。それに比べて凹地は泥地であるため、地震の揺れ方が違ってきます。

それから三つ目に川がつくった平野があります。花水川沿いに見られる川がつくった平野はさらに3つの微地形、すなわち、自然堤防、旧河道、後背湿地に分けられます。自然堤防は、川が氾濫する度にできた自然の堤防、高まりです。昔からの集落はこの高い所に発達してきました。旧河道はかつての花水川が、砂丘を削って流れた流路跡です。旧河道より離れたところは後背湿地です。大雨が降ると川は土砂をたくさん運び、氾濫したとき、粗い砂は重いので近くに溜まり自然堤防を、細かい土砂は遠くまで流され、後背湿地をつくります。集落や街道は高い自然堤防にでき、その背後が水田地帯になります。

昔からこうした地形の性質を活かした土地利用が、行われてきました。後背湿地は田んぼですから、人が住みませんでした。ところが現在は宅地化しているため、地震の被害が出やすいということになります。

昭和22年の地形図と明治時代の地図を重ねると、花水川河口での川の流れが変わっていることがわかります。

それからもう一つ、丘陵地の谷があります。一番大きいのは葛川と不動川ですね。それから長谷川、血洗川、鳴立川、三沢川、そのほか小さい川が、海がつくった平野を削って流れています。これを谷底平野と言います。この谷底平野が地盤としては一番問題で、厚い粘土層からなり、軟弱地盤をつくります。

## 予想される地震

神奈川県が問題にしているのは東海沖地震、南関東地震（大正関東大地震の再来）、神奈川県西部地震、神縄—国府津・松田断層の4つの地震です。東日本大震災にみられたように、これらの地震が連動する可能性があると言われるようになり、南関東地震と神縄—国府津・松田断層の連動が見直されています。この連動で起きたら、震度7です。

そのときの液状化の県での想定は、平塚ではひどいですが、大磯町では葛川や不動川の周辺以外はあまり起こらないようになっています。逆に大磯町は崖崩れが多くなります。特に高麗山の辺りは多く、関東大震災でも崩れています。仙台の例では、山を造成した盛り土が滑りました。石神台は盛ったところが崩れる可能性があります。

## 大磯町の活断層

地層がずれているところを断層と言いますが、表面がずれているだけでは地割れで、地下の深いところからつながっているものが断層です。そして、継続して動いている断層を活断層と言います。

この地域には活断層がたくさんあるのですが、1,000年に1m以上動くと言われている断層には、小向断層、生沢断層、国府津—松田断層の3つがあります。国府津—松田断層は小田原にありますが、大磯丘陵は西縁を区

切る国府津－松田断層によって隆起しています。この断層は、1回地震があると5m上下に動きます。生沢断層は、場所によっては1,000年に2m動くといわれます。

高麗山、湘南平は隆起して山になっていますが、花水川の東には山が続きません。平塚・大磯境のボーリングデータを見ると、花水川を隔てて東側に行くと岩盤がみえませんが、ですから、推定ですが活断層があると考えられます。

生沢断層も、13万年前以降の段層履歴があります。石神台の断層は、水道山下から小田原・厚木道路の大磯パーキングエリアの辺りを結んで南北に走っています。生沢断層は寺坂、生沢、国府新宿を通って相模湾海底谷につながります。石神台の断層はこの生沢断層を切っている断層です。でも、この断層は、70万年前の地層を50mずらしていることしかわかりません。湘南平は10万年前の地層が100m動いていますから、1,000年に1m動いています。それに比べて石神台の断層は、1,000年に7cmの割合になります。

活断層は活動の履歴が大事です。国府津－松田断層は3,000年に1回とわかっています。前に動いたのが3,000年前なので、この100年以内に動くと言われていました。その地震が南関東地震です。他の断層は前回いつ動いたのか、何年後に動くかがわかりません。ボーリング調査などを行い、過去の地層がどれくらい動いたのかを調べる必要があります。

## 講演2：関東大震災・神奈川県大磯の被害の諸相

北原 糸子 氏

(立命館大学歴史都市防災研究センター教授)

### 震災の歴史を振り返る 一元禄地震

関東大震災の前にこちらの展示でも紹介されている元禄地震についてお話しします。森先生のお話でも度々出てきましたが、18世紀初め、1703年に大きな地震がありまして、房総半島では大変な被害が出て6,000人くらいの方が亡くなりましたが、相模湾でも被害がありました。

具体的な史料で、元禄地震でどういう被害があったのかというと、「祐之地震道記（すけゆきじしんみちの

き）」という史料があります。祐之は、江戸から京都に帰る途中、ちょうど22日の夜、戸塚で地震に遭いました。彼は下賀茂神社の宮司で国学者だったので、書いてある内容の信頼度は高いと言えます。それともう一つは、実際に自分が地震の揺れを体験しているということで、もう少し前まではあまり使われなかった史料なのですが、最近では相模湾沿岸の被害を考える上で非常に注目されています。

道筋は22日の日暮れに戸塚に到着して、地震に遭い、いろいろと宿を探しますが、ほとんど潰れていてうまくいかず、26日まで蔵田（現横浜市戸塚区上倉田町）に宿を取り、世話になります。祐之は家来を連れていて、家来を含めて15人で移動していました。京都へ向かうため、まず、藤沢に行きますと、藤沢では大変な被害があり、「人家ことごとく傾き、34人圧死」と記録にあります。そのまま東海道を進み、馬入川を渡りますが、馬入川の渡も橋が壊れてなかなか渡れないので、川上の方から渡船で渡ったと書いてあります。そして、その後が大磯ですが、26日に花水川を渡ります。「橋詰めの地形が裂け、泥水が湧き出す」とあり、森先生がおっしゃっている軟弱地盤そのもので、液状化が激しかったようです。また、「街道右手の山崩れ」と、山崩れも観察しています。それから、申刻（さるのこく、現在の午後4時頃）に大磯に着き、大磯宿は大半の建物が傾いたり、ひっくり返ったりしていて、4、5軒だけ残っている、とあります。ここが極めて特徴的なケースですが、地震の日、海の潮が2丁余り引き、沖へ引いた船がまた浜へ戻ってきたとあります。そして、大磯では圧死者が50人とあります。これらの記述は、他人を複数介しての伝聞ではなく、直接見た人に聞いている内容なので、信頼度は高いと思います。

さらに、元禄地震のときは、内陸部で土砂災害がありました。山中湖のところは土砂災害がすごかったんですね。元禄地震は今から300年前のことでもあり、この辺り帯は小田原も含めて被害があるにもかかわらず史料が少ないです。しかし、房総の方は非常に史料が残っています。海岸線が隆起したり沈んだりして漁場が変わり、漁場の争いが起こったため、たくさんの絵図が残っていて海岸線がたどれます。



## 関東大震災 ―どんな災害であったのか

関東大震災はご存知のとおり1923年9月1日の昼少し前に起こり、火災が広がり、東京と横浜で多くの方が亡くなりましたが、関東大震災の場合は揺れの被害が非常に少なく、焼死者と圧死者の比率を見ますと、圧死者が占める率は圧倒的に少ないということが特徴です。

また、東日本大震災のときもいろいろな法律ができましたが、関東大震災のときには天皇の名前で勅令という形態での行政令が出され、9月2日には、非常徴発令、臨時震災救護事務局をつくる勅令、そして戒厳令が出ます。ちょうどこのときは、内閣が交代するときであり、震災対応の基本を構成する3つの勅令が臨時首相代理の元で出された点は、極めて特徴的です。

9月3日に無賃乗車が認められたため、罹災者の中には地方へ逃れる人達もいました。彼らは、だいたい実家や親戚を頼りにしました。逆に言えば、この時期の東京や横浜は、そういう人達が出てきて働いていた場所だということです。今の問題とすれば、今東京や横浜などの都市にいて働く人達が、震災があったら戻るところがあるのかということを考えなければなりません。

## 大磯警察署の対応

大磯では、関東大震災に関して、大磯警察署の資料があります（『震災記録』）。大磯警察署は大磯町だけでなく現在の平塚市の一部や二宮町も所轄していて、広域

の情報と対応が反映されています。それによりますと、大磯警察署はともかく大活躍します。9月1日から列車の転覆や、平塚の海軍火薬廠の爆発に対応し、内陸の方の様子を確認するために人を派遣します。驚いたことには、火葬場を平塚の海岸につくって遺体を焼くということを9月1日からやっています。非常に早いです。

それから流言。それは、津波が来るという流言と同時に、9月2日以降は朝鮮人の問題が度々出てきます。そして、「大地震海嘯ノ虞（うれい）絶対ニナシ」という張り紙を各所に貼ったという記録があります。民衆を落ち着かせるためだと思います。

2日になりますと、非常に早く死者の発掘をやるとか、在米の調査をやるとか、朝鮮人横行の風評が盛んだというのも度々出てきます。これは、本来の治安の問題にも関わります。もう一つ、警察署は傾いたため、三輪別邸のところに避難所をつくって、軍隊もそこに駐留するようにします。

9月3日になりますと、朝鮮人の問題がありますので、内地人であることを証明する証明書を渡しています。9月4日には、緊急の救護所を廃止します。そして、号外だと考えられますが、東京日日新聞の記事を入手して、大書したものを掲示しています。

戒厳令が敷かれたため、全国から軍隊が集まりますが、被災地域へ到着するのは5日ぐらいです。軍隊の場合には食糧や宿所は準備がありますので、民間の避難民とは違いますが、平塚、大磯では豊橋工兵第15大隊の軍曹らが準備に来て、静岡の本隊が来ています。藤沢の記録を見ますと、甲府から聯隊（れんたい）が来ています。

平塚の場合は相模紡績に1,200人ぐらい女工さんがいて、その内200人くらいの方が工場で圧死します。それで、残った方々は実家へ帰るのですが、東北北陸地方へ一時帰国させるため、20名に1名の保護者を会社側がつけ、届け出て、警察が人員検査をして、9月9日から30名を一団として帰国させたという記録があります。これも初めて見た記録です。工女というのはだいたい16～20才ぐらいの花盛りの女の人達ですので、道中どういふことがあるかわらないということで保護者をつけます。しかし、保護者も安心できるわけではないので、何かあったら大変だということで、証明書は同行の保護者に不正や不都合がないよう、沿道の各警備隊長、警察署長、郡市

町村長、鉄道駅長に注意警戒を呼びかける内容でした。実際に彼女達が着いた先の資料が宮城県公文書館蔵の巨理郡の行政簿冊に残されていました。現在の宮城県巨理郡巨理町の農村からは集団で織物工業に勤めている人達が、一つの村で20人ぐらい来ています。彼女らはまさに平塚織物工場で働いた工女たちでした。ですから、集団で帰国するというのは、ある程度まとまって村から来ているという状況を反映しているのだと思います。一般的にはそれぞれ自分の実家に帰ると言うことが多いのですが、工女のような若い女の人達で、震災の状況の中では極めて不安ですし、こういう処置がありました。

9月9日には気象庁の地震学者が来まして、震源地や地盤の状態を調査します。彼らは、大磯、平塚は隆起のため海水が減退したというコメントを残しています。

当時、地図を作成した陸軍陸地測量部は、9月6日から16日の間に60名ぐらいの地図をつくる専門家を派遣します。そして、既成の地形図に被害を書き込ませます。彼らの一つの目的は、橋や道路の状態を調査し、川を渡るか、自動車を通れるかを確認することでした。大磯の辺りについては、花水川の周囲はかろうじて自動車を通る、道路は亀裂、橋梁小損、鉄道橋小損、列車転覆のため死者8名、負傷者3名、水準点異状なし、大磯は1,700戸の内、倒壊400戸、半倒壊600戸、圧死者25名、片岡大将令息圧死と書いてあります。その後、国府本郷、国府新宿、二宮の方も書いてあります。この地図は全部で63枚あり、現在は国土地理院が保管しています。

## 大磯の被害

当時の統計から大磯の被害を見てみます。中郡のなかで、大磯の建物被害は1,500ちょっとです。こちらは破損も入れていますので、陸地測量部の地図に書かれていた倒壊数と比べると多くなっています。中郡の中で、秦野だけは大きな火災が起きています。全流、半流がある大山町は、山津波の被害があったところです。

次に、大磯各町の建物被害を見ます。これは、各町の当時の戸数や世帯数がわからないということですので、被害の数だけになります。台町は被害が大きく、裡道は少ないようですが、裡道はそもそも戸数が少ないのではないかと思います。また、職業別の被害数については場

所がわからない統計ですが、商業の人達の家が圧倒的に多い。家屋の全半壊で救助の対象になった統計を見ますと、罹災者は49、借家と持家では持家が半分以上あります。

大磯に避難した人達がどういう町に滞在したのを見てもみますと、だいたい500人くらい一時期来たようです。町そのものに滞在した人達の数というのは、長期間避難した者だと思います。これは10月段階の数値ですが、基本の戸数がわからないので単純に多い少ないと言うことはできません。しかし、必ずしも被害が少ないところにたくさんの人が来ているという状況ではないことはわかりますので、親戚とか遠戚とか、何か関係があるところで避難しているようです。

## 復興への歩み

関東大震災で特徴的なことに帝都復興事業というものがある、5億円という莫大な金額が復興事業に投入されますが、これは東京市と横浜市に限られます。他の場所は、それぞれ復興委員会をつくり、復興の方針を決めましたらそれに基づいて起債します。大磯は復興委員会を10月6日につくります。だいたい10月3日ぐらいに内務省から指令が出るようです。そして、最初に大磯の全財産を調べて、公債の発行額を決めます。これは大磯だけでなくいろいろな場所でやっています。大磯は、財産としては1万円ぐらいあったようです。

それから、神奈川県では復興の一つとして生業資金貸付という制度が、小額の資本が必要な人達のために設けられました。これは、国税年額3円以上、もしくは担保物件があることを条件に、200円までを最高とし、貸付期間1ヵ年、ですから極めて短いのですけれども、6ヶ月据え置きで均等に償還するという制度でした。

## 震災人口調査

震災後の人口変化を把握するために、人口調査をします。大正9年の第1回国勢調査の方法に基づいて、震災地罹災者人口調査をやります。この調査に関する記録が大磯にも残っています。指定の用紙に書き込むのですが、皆が同じように書けるわけではないので、信頼できる人

を決めて調査員を委託します。その調査員が事前に説明して、納得してもらった上で、大正12年11月15日午前0時を基準に、そこにいる人だけを調査票に書きました。

## おわりに

ここでお話をして町の方にも考えてほしいことは、大磯の史料というのは非常に重要な史料だということです。郡レベルのものが残っていることはあるのですが、町の史料として残っている、町全体としてどうしたのかという史料はなかなかありません。大磯町はそういう意味では残りが大変いいです。もちろん、自然環境の問題が地震の場合には決定的になりますが、しかし、その後の対応は人の対応です。社会の対応です。そういうことが具体的な過去の体験でくみ上げてわかるという点では、こういう貴重な史料があるというところは少ないので、ぜひ今後、いろいろなかたちで大事にして、活用を考えていただきたいと思います。

## 討論

### 北原氏から森氏へのコメント

**北原氏：**一番、国府津－松田断層が心配だと思い、国府津－松田断層とつながる相模トラフが連動したら大変なことになると思いました。その辺、さらに詳しく伺いたいのですが。

**森氏：**相模トラフと国府津－松田断層はつながっていますが、どこまでの範囲が動くかはわかりません。相模トラフからのつながりは生沢に入り込んでいますので、生沢断層が動く可能性もあります。いろいろなパターンが考えられますが、活動履歴を調査しないとどのように動くかはわかりません。

### 森氏から北原氏へのコメント

**森氏：**北原先生のお話を伺って、元禄地震の被害がわかる歴史的な貴重な資料を、自然科学と連携させていきたいと考えました。自然科学の分野では、元禄地震では房総半島がたくさん隆起したと言われ、三浦半島、城ヶ島などにも元禄地震

の跡があります。私も最近、逗子の和賀江島で、元禄地震の跡ではないかなという証拠を見つけました。ただ、湘南の中でも西側、茅ヶ崎や大磯辺りでは、まだ元禄地震の跡が一つも見つかっていません。湘南の辺りが全く隆起しなかったとは考えられません。

## 質問

**質問1：**関東大震災のときは連動ということはなかったのでしょうか。今回のお話では、あまり津波については心配する必要がないように聞こえましたが、どうなのでしょう。

**森氏：**最初のご質問ですが、関東大地震自体は相模トラフの断層面が動きました。小田原では小田原地震（神奈川県西部地震）と言って、江戸時代から継続して起こっている地震があり、約60年ごとに起きるだろうと言われています。これが関東大震災のときに連動したのではないかという見解があり、2000年頃に地震が起こるのではないかと行われましたが、結局起こりませんでした。もし、国府津－松田断層が南関東地震だとすると、小田原は沈まなければいけません。しかし、関東大地震は大磯丘陵も上がり、小田原も上がりました。ですから、このプレート境界と関東大地震は関係なくなってしまいます。このため、南関東地震の震源断層についてはプレート境界とは異なるところにあるのではないかという意見もあります。

津波については浅瀬が問題になります。県西部の相模湾は急激に深くなっているのが特徴です。ただ、入り江になっているところは危ないです。相模トラフが震源になるときと、南海トラフが震源になるときは違いますが、相模トラフでの地震である関東大震災や元禄地震のときは、波が相模湾を横切りますので、安心していいよとは言いませんが、鎌倉などに比べたら、小田原や大磯は津波の被害はありません。鎌倉に10mの津波が来たからといって、大磯にも同じ規模のものが来るということはありません。

**質問2：**歴史的な資料というのは、特にこの地域のものでこれからさらに見つかる可能性はありますか。また、この辺を探すと面白いというヒントはありますか。

**北原氏：**この地域を集中的に調べているわけではありませんので、お答えになるかどうかわかりませんが、元禄地震についても関東大震災についても、沿岸部の方では津波や隆起の問題で計測が進んでいると思いますが、内陸の方の土砂災害の被害がきちんと捉えられていないことがあります。おそらく、いろいろなところで小規模な山崩れがあり、元禄地震のときがそうだったのですが、地震が起こった後、たくさんの雨が降ると大きな被害をもたらします。たとえば、皆瀬川というところではほとんどが埋没し、家が潰れたという記録が元禄地震の場合にはあります。その後、現地に行ってみますと、新幹線

が通るところでたくさんかさ上げし、わからなくなっています。そういう意味では今の開発が原地形をわからなくさせています。

森先生がおっしゃたように地盤などの地形は重要なのですが、それをマスクしてしまうような開発が、内陸部では人口が増えたことによって家を建てるために行われています。そういう意味では、その辺りの古い地形図などから昔の地形をご覧になるとか、もう少し過去にさかのぼって、古文書から大雨のときにどうしたのか、河川がどのように氾濫したかを調べることができます。

何か目的を持って調べると史料が集まってきますので、調べたいことを決めて見ていくと、つながりが自然に出てくるというのが史料の探し方だと思います。

(編集：当館学芸員／大石三紗子)

## 平成25年度博物館実習生による

### 「大磯の名所 — 絵はがきと写真から見る昔と今の姿 —」展

当館では、毎年、博物館学芸員資格取得を目指す実習生を受け入れており、実習の一環として常設展示室の一部コーナーを使って、実習生自らが企画から完成までを実践する展示替実習を行っています。

本年度は大磯の名所として、大磯八景を取り上げ、絵葉書の写真と現在の写真を比較しています。平成26年8月末頃まで展示していますので、ぜひご覧ください。



【平成25年度博物館実習生】

Report —大磯町郷土資料館だより— No.34  
平成26(2014)年2月28日発行

編集・発行 大磯町郷土資料館  
〒255-0005 神奈川県中郡大磯町西小磯446-1  
TEL.0463(61)4700/FAX.0463(61)4660